

氏名(本籍)	おか やま あさ こ 岡山麻子(香川県)		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	博甲第2740号		
学位授与年月日	平成14年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	歴史・人類学研究科		
学位論文題目	竹内好の思想史的研究		
主査	筑波大学教授	文学博士	池田元
副査	筑波大学教授	文学博士	川西宏幸
副査	筑波大学教授	文学博士	佐藤文俊
副査	筑波大学助教授		千本秀樹
副査	筑波大学教授		池内輝雄

## 論文の内容の要旨

本論文は、時代と対峙し日本近代の文化構造を批判し続けた竹内好(1910～1977)の思想的軌跡を追究した作品である。竹内における「文学精神」の形成・成立・展開の過程に内在し、文学者の依って立つ「場所」とそこで価値転倒のダイナミズムを解明したものである。時代の中における文学者・知識人のあり方、文学や学問のあり方を根源的に問いたす意図をもった論文であり、序章・結章を含めて前5章7節で構成されている。

序章「研究の課題と方法」は、絶対者不在の場での自律性獲得の方策を課題とした文学者・竹内の軌跡とその追体験的接近方法について述べている。文学者の本質を、時代の秩序を規定する価値の転倒と新しい価値観の創出においてとらえた、竹内自身の「文学者としての自己規定」の仕方に注目し、時代に働きかける文学精神の形成・成立・展開のあり様を竹内の実在的な切迫性から明らかにする内在的方法をとる、としている。

第1章「竹内好の『北京日記』—文学精神の形成—」は、1937年からの北京留学時代の『北京日記』を中心に、文学認識の本質を人間の存在性に求めたものである。戦時中国の現地状況を把握することができない自己に失望し、状況に対峙する拠り所を求める過程を描いている。自らの拠り所を失い社会的に無となった放蕩のち、岡本かの子の作品を通して、イズムや論理によっては届かない「人間の生の存在そのもの」を凝視する認識のあり方を学び、迷走からの脱出の契機をつかんだ、としている。

第2章「『大東亜戦争』と竹内好の魯迅論—文学精神の成立—」は、北京からの帰国後、当時の日本文化が人間存在の根拠に根ざすことなく浮遊している状況に対して危機感をいただき、竹内が文化の認識の仕方を改めて政治性・社会性において獲得し、魯迅論において成立させた過程を追ったものである。竹内が「大東亜戦争」の場や中野重治の作品を通して、戦争や時代への向きあい方を考え直した時期である。政治権力から政治活動や執筆活動を否定され政治的無力となった身において、なおも中野が、既存の秩序によって否定され切らない人間の存在を一つのコスモスとして表現しようとしていたところに「文学者の態度」をみた、としている。

「竹内好の魯迅論」は、竹内が人間の存在性と政治性感覚の上に、文学者として時代との対峙のあり方を求めたものである。竹内は、魯迅の文学を自己の存在そのものを社会的犠牲者に対して罪を背負った存在と自覚して凝視する「贖罪の文学」とする。魯迅にとって、文学は一義的には自己の生命に向き合いそれをつかむために存在し、文学に先行する一切の立場が「無」に帰され、政治的には「無力な位置」に立つ。それは、政治秩序を無化

する非政治的態度であると同時に、政治秩序の受容を拒否する態度でもあり、秩序によって排除されたものが一つの存在として回復、認知される「混沌の場」の形成でもある。そうした政治秩序に包摂されえない場の創出が文学者の役割なのだ、とする。

第3章「竹内好の戦争責任論と戦後の思想的課題—文学精神の展開—」は、戦争における竹内の思想的軌跡を、自らの中国文学者としての戦争責任の自覚から導き出された思想的課題への取り組みとみて、1948年から51年までの中国論と、50年代の国民文学論に求めたものである。

竹内が、中国文学者や知識人の戦争責任を、民衆から断絶した場で文学や学問を展開したこと、戦時下の中国の近代性や国民感情や革命性を捨象した中国像を提示したこと、中国への帝国主義侵略に抵抗する回路を組織化できなかったこととし、竹内の新たな中国像の創出に注目している。竹内は魯迅の抵抗精神を、非西欧としての自己意識の場から内発的に自己形成される近代性としてとらえ、そうした再生の契機をもつ中国近代を「自律的近代」として把握しようとする。その極限形態として、無に帰した毛沢東のなかに、生存の危機のただなかでの抵抗を通して、逆にあらゆる可能性の獲得へ転化する、「自己喪失と再生の弁証法」の場を見出そうとした、としている。

日本の近代は、こうした抵抗と自己意識に根づかず浮遊していることにおいて中国近代と対極的な位置にあり、西欧近代の水準を外在的基準として自我と無媒介に価値設定し志向してきた。竹内は、個人の主体性と断絶し、民衆的生活基盤と断絶した、それゆえ生産性の欠落した日本文化の構造的問題を精神的墮落と批判し、日本共産党や諸々の指導者意識を批判した、とする。

竹内の民族や国民文学への言及は、上記のような他律的・外在的な日本近代の文化構造を克服し、日本人の自滅を救い新たな文化や自律的規範のあり方を模索するものであった。竹内が「民族」を自律的精神態度の概念としてとらえ、民族を思考の回路に含まぬものとして近代主義を批判し、イズムの論理や認識のフレームから捨象された自己の内なる心情を回復するものとして日本浪漫派の原初的問題意識を再評価しようとした、とする。

文学者は、時代に文学的形を与えるものだとして、民衆の心情レベルに滞留する「もやもやしたもの」に言語的表現を与え、民衆意識を基盤とした規範や文化のあり方を求めるべきだとするをもつて、竹内の思想的結語とし、その期待を民衆との読書会である「魯迅友の会」の運動につないだのだとしている。

結章「自立的思想の『系譜』—竹内好の『近代の超克』論—」は、竹内が、「大東亜戦争」期に未解決のまま残した、戦争や時代への向きあい方としての西欧的近代秩序と近代原理の超克という問題に立ち返り、獲得した民衆的生活基盤に立つ自らの立場から改めて自律的文化の形成の可能性をさぐるようとするものであった、とする。それは、竹内自身による自己の思想史的総括であったとして位置づけられている。

## 審査の結果の要旨

本論文は、竹内好の自己改造に貫かれた文学精神の形成・成立・展開過程に深く内在して、その精神性と思想性をしなやかに解きあかした、極めて水準の高い、構成力のある作品である。

評価の第1は、竹内の思想的営為の一貫した基軸を、文学者の時代に抵抗する「場所」と、そこでの「価値（意味）転換」を求める点にあるとし、既存の政治権力や価値観によって切り捨てられた存在の回復と再生にある、とする文学に対する根源的な規定をとらえたことにある。竹内に、最も根底的な認識のレベルで新しい統一的な像を与えたこと。

第2は、思想の形成から成立と展開の時系列的軌跡と、「大東亜戦争」下における未決の問題の解決に至るまでの一巡する思想的深化の内在的分析とを、思想を支える精神的態度や体質批判のレベルで統合して論じ得た点で、思想史論文としての方法論的確かさや論理構成の必然性を卓越した形で示したこと。

第3は、本論文は竹内の『北京日記』を初めて本格的に読み解いた貴重な成果でもあり、これまでの竹内研究

に決定的に欠落していた文学精神の核からの一貫的解明として、看過しえないものとなっていること。

第4は、本論文は、民衆の生活意識と乖離した日本近代の文化構造を批判し、自己意識に根づくアジア固有の近代をさぐるようとする竹内独自の思想的営為を再評価しようとするもので、日本近現代における外在的な「近代」観、「アジア」観、「学問」観覧—そのものを根源的に問いただそうとする著者自身の深い問題意識に支えられていること。

近代主義的な政治の形やイデオロギーの形、論理の形をこえて、民族や国民のモラルや感情まで形としてすくいあげようとする竹内の視界に徹底して内在した作品であるが、それがゆえに、若干の問題も残されている。竹内への徹底した内在と同時代比較は、その深さにおいて類をみないレベルに達したものの、その視座構造を批判的に対象化し位置づけていくうえでは、今後、対象との距離と対象範囲をいま少し広げていく努力が要求されてこよう。

本論文は、こうした課題が残されているものの、昭和期知識人研究の一環として、時代と対峙する文学者・知識人の「場所」とそこにおける価値転倒のダイナミズムを、竹内好を典型例として極めて深く解明した点において、学界に大きな地歩を占めるものと認められる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。